

ケアしケアされる社会を

◆ケアのむずかしさ

私たちは、一生のうち幾度となく、医療・介護・福祉などの専門的なケアを受けることになります。つまり私たちは全員がケアの「受け手」です。一方、専門的なケアの「担い手」は、受け手の身体状況はもちろんのこと、家庭・生活環境、経済状況、人間関係や価値観、およびそれらを形成してきたその人の歴史など、さまざまな多様性・複雑性を踏まえてケアをおこなう必要があります。

◆ケアの課題と私たち

そのケアの現場は現在、さまざまな点で揺れています。例えば平成30年度の介護労働実態調査によると、全国の67・2%の事業所が従業員の不足感があり、訪問介護員に

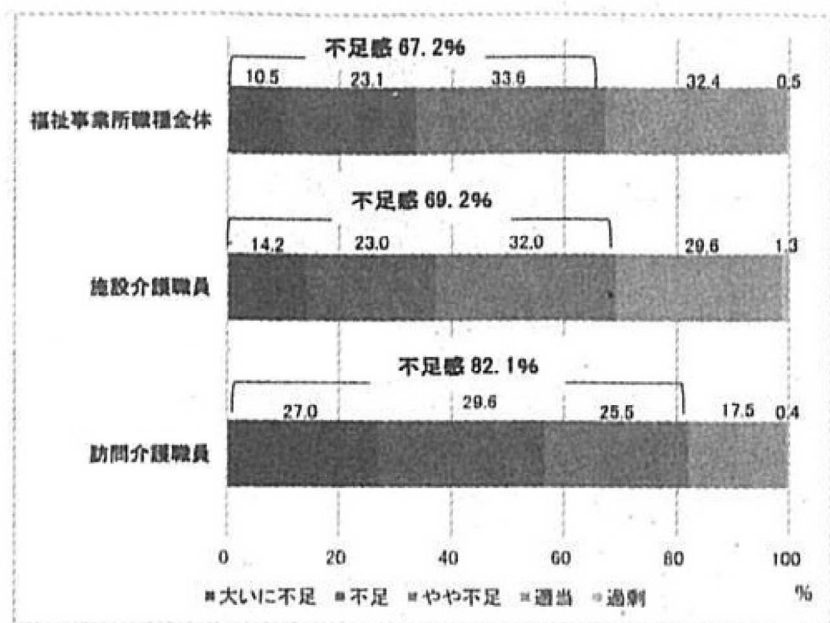
埼玉県立大学准教授 新井 利民

至っては82・1%の事業所が不足を感じています。また同調査によれば全国の正規介護職員の離職率(14・6%)は、正規労働者全体の離職率(11・3%・平成30年度雇用動向調査)と比して高くなっています。ケアの現場の人材不足は、常態化しているのです。

これらの課題解決のためには、国や自治体などの取り組み



<32>



全国の福祉事業所等における介護職員等の不足感について

出典：平成30年度介護労働実態調査(介護労働安全センター)結果報告書より筆者作成

担い手と共に考える社会づくり

みが求められますが、それだけではないのでしょうか。ケアは「感情労働」であるとも言われ、患者・利用者やその家族との感情のやり取りが仕事の一部に組み込まれていきます。ケアの担い手とよりよい関係を保つことや、よりよい職場環境をつくることは、ケアの受け手である私たち一人ひとりが取り組むことができます。

また、ケアの担い手は、日々のケアの中で、患者さん、利用者さん、その家族や地域住民などの言葉がけやふるまいから数多くのことを学び、明日のケアの糧にしています。

◆共に創るケアを目指して
ケアの受け手である私たちに必要なのは、単に対価に見合ったサービスを要求する「消費者」という態度だけではなく、担い手と共にケアのあり方について考え、ケアの質の向上や新たなケアの創造に参画していくことではないでしょうか。私たちの一人ひとりの力によって、ケアし、ケアされる社会を創っていきたいものです。